



广东外语外贸大学

GUANGDONG UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES

私の添削ノート

东方语言文化学院日语科

高里 盛国

「私の添削ノート」再発行にあたって

— 序にかえて

以前本大学の日本語教師として招聘された当初は二年の会話と三年の作文を担当した。中国学生に対して会話や作文を指導するのは初めてなので、多少戸惑いもあったが、日本語科の先生方や学生皆さんの心遣いでどうやら終えることができた。作文指導においては学生等の作文を添削し、その修正、訂正したところ全て教師用ノートに書きとどめておいた。

そのノートを本校の李志穎先生がワープロで印字してもらい、一冊の添削ノートを製本することができた。次年度も二年会話、三年作文に加えて、新しく三年選択科目の『日本文学史』も担当した。その講義に百名以上の学生が受講、このような大勢の前で、マイクを襟に差しての授業、慣れない機器の操作など、全て学生が補佐した上での授業展開。奈良時代の上代文学から、昭和平成の近現代文学に至る上、下学期の二学期を通じて、無事終えた。この文学史の講義で特記したい点の一つがある。授業開始三十～四十分前に講堂を開室してもらい、当日の講義内容（教科書外）を黒板一杯に板書しておいてから、授業を始める方法である。文学史の教科書はあるにはあるがそれに記載されていない事項は直接口頭での講義、または事前の板書事項で補足説明で追加して、上、下両学期とも通してきた。さて特記したいというのは試験についてである。両学期末とも筆記試験（レポートではない）問題作成にあつては教科書八割、講義や板書事項から二割として出題したところ、学生の中に両試験とも満点（百点）が二人いて、感動したことがある。（高校教師の頃、その形式で出題したところ九十五、六、あるいは七、八点はいたが満点（百点）は記憶にない）

それは何を物語っているのか、言うまでもなく授業に対する姿勢、またその集中力である。一言一句たりとも聞き漏らすまいとして授業内容を全て吸収し、その知識を自分のものにしたことを示している。やはり大学生は違うと再認識した次第である。

本題に戻すと三年作文も昨年同様、作文添削後は図書館でその訂正箇所をノートに写し、一冊のノートが埋め尽くされるくらいになった。二年目は学生の中に協力してくれる者がいてワープロ印字と印刷まで手伝ってもらい発行することができた。前回同様、会話、作文クラスに配布した。

さて、今回であるが実は添削し、修正し訂正した箇所をノートする時間が全くなかった。従って添削ノートは作ってない。今回は毎時間課題を与え、提出された作文を添削し修正訂正して返却する。二学級約六〇名の作品を全て目を通し、その文章にふさわしい語句を書き添えたり、不要なところは削ったりして上学期は十数回も繰り返して授業をしてきた。その結果、頭初の九月の文章とは違って数段と進歩し、別人のような文章になってかなり上達した。下学期は小論文的にし、字数も倍の八〇〇字から多い場合、課題によっては二〇〇〇字と増した。そうなのでも立派な論文として通用する域まで達しているから学生の努力ぶりとその上達ぶりには賞讃に価する。

ところが今年度は二年の基礎日本語の教材研究に日々追われ、毎日が図書館詰めである。そのために時間的余裕や精神的な余裕すらなく明け暮れしてきたがやはり、現三年生に以前と同じように添削集として一冊のまとまったものをあげたいという思いが前々から持ち続けていた。

幸いなことに本大学院生日本語科の鄭重君が添削ノートの編集補助やワープロ印字、更

に印刷所との交渉など微細に渡り応援してくれたのでこのように再発行することができた。しかも、彼と卒業生等の提案で過去二カ年間の作文添削ノートを一冊にまとめれば、大体中国の学生が作文上たすべきところ、留意すべきところは分かるとの指摘があり、その提言も大きな再発行の動機となったのも事実である。終わりに再発行に際しての経過を書き述べてきた。この小冊子を他山の石として今後の作文上に参考にしてもらえれば幸甚である。

二〇〇八年五月吉日

高里盛国記

目 次

- | | |
|---------------------------------------|---------|
| 1. 解説 | ①～⑦ |
| 2. 2004 年 9 月から 2005 年 1 月までの
課題添削 | 1～70 |
| 3. 凡例 | 71 |
| 4. 添削の実例 | 72～132 |
| 5. 編集後記 | 133～134 |

1. はじめに

日本語作文指導において全般的な傾向を記述しておきたい。

まず、日本語による文章を書く時、つまり、作文は日本人が読んでも何の違和感もなく読み進めていけるような文章がよい。

例えば、使用する文字、表現したい言葉、主語と述語との呼応、適切な語法であるか、などである。

前・後期の一年間、添削指導を通して随時気がついた箇所を指摘し、修正したり、書き換えたりした部分をまとめたのが本書である。

提出された作文の添削作業を通して共通する事項やその傾向などを記述していく。

その前に指導した学生の作文について一言触れておきたい。殆どの学生が大学入学して初めて日本語を学習し始めた。わずか二カ年足らずで堂々とした文章が書けるに至ったのは誠に賞讃に値する。

その背景には学生らに日本語の「いろは」から教授した中国人教師の並々ならぬ熱意と学力向上のために教授法の工夫や努力の成果があり、先生方に対し、心から敬服している。先生方の熱意のこもった教えにあいまって素直な学生等は^{ひたむき}直向な向学心で応え、常日頃から日夜日本語学習に明け暮れ、教室で、図書館で、寮で更にキャンパス内の緑蔭で一心に学んだ成果もあろう。

従って殆どの学生の作文は上々の出来といえる。又、九月当初から書く回を重ねるに従い、表現力もついてきて、前期の終わり頃、又は後期になると訂正する箇所も減少傾向にあり、徐々に向上していることが伺えた。

特に後期は小論文形式を取り、四年次の卒業論文の事前指導的な内容に切り変えた。

文章そのものに独自の物の見方や考え方をまとめるよう、要求した。その要求に応えて独創的な意見や見解まで論述できるようになった。しかし中には提供した資料の枠を出ない者もいたが多くの学生は論文らしい記述であり、短期間でものにしたということは立派であるとしか言いようがない。

断っておくがここに添削例として列挙したのは多量のようなようだが実はそうではない。一人800字から1000字の文章中、平均2～3語、60名の学生が提出した22回分の作文だから、全体から見るとそんなに多くはないのだ。ここで言いたいのは学生諸君の不適切な表現が多いと見てはいけないことだ。

多くの課題文からの指摘だからむしろ少ない方である。数多くの原稿から指摘したわずかの訂正・修正の例として見ていただきたい。

2. 文字について

日本の文字は言うまでもなく、中国から由来する。漢字・平仮名・片仮名がそうだ。しかし中国から導入された漢字でも今、中国で使用されている文字がそのまま日本で使用されているとは限らない。新中国（中華人民共和国）建国以後、普及し始めた簡体字はない。日本の漢字でも新体字として簡略化された漢字も多い。その中には一部ではあるが、簡体字と共通する字体もある。しかし多くの簡体字は一般の日本人には読めない。簡体字

は元来草書体を簡略化した字や漢字音の類似性から画数を極力少なめに考案し、工夫し、簡略化したものであろう。その簡体字は個人的には非常に合理的で簡便な文字だと感心しながらも日本の文章には使用されていない。日本人にとっては馴染みの薄い文字であるため指摘した。

提出された学生等の作文に目を通すと普段書き慣れた簡体字を無意識の中に表記した例が少なくない。これは些細な指摘かも知れないが、日本人には解せない。その簡体字を指摘していくのも作文指導上の重要な基本学習の一つである。

又、逆に学生の中には簡体字の元の漢字、繁体字が適切かと思ひ込み、旧字体（現在台湾省や香港で使用している字体）で表記したのもいたがそれも日本で使用している新字体に修正し、訂正の対象とした。具体例は本文に多く指摘してあるから参照するとよい。

3. 文体について

文体とは文章を書くにあたっての表現上の様式（スタイル）である。散文と韻文に分け、その中の散文を通常の記事とする。作文における文体はその通常の記事をさし、それを常体文と敬体文に区別する。

常体文（常体）は「～である・～だ」で結ぶ文をいい、別に「である調」ともいう。

敬体文（敬体）は「です・ます」で結び、丁寧な表現で別に「です・ます調」ともいう。

常体は主に論説文など「書き言葉」に多く用いる。敬体は主として「話し言葉」や手紙・又は児童など相手に語りかける形の文章に用いる。

作文授業の当初の課題は「自己紹介」「故里紹介」であり、敬体で表記する。それ以後の国慶節・余暇について・神舟五号成功に思う…などは常体文で表現するように指導した。

そこで注意しなければならないのは常体で表現するか、又は敬体で表現するかの文体の統一である。

当初から「です・ます調」で表現したら終わりまでその文体で通すように指導した。

多くの学生はその通り表現しており、^{おおむね}大旨良好であった。「である調」に切り換えた当初は敬体も常体も両文体が入り混じって不統一も甚だしかったが作文提出の回数が増えるに従って文体の統一も徐々によくなり、後期小論文の形式になると殆ど常体文で書けるようになった。学生の中には敬体表現がよいという考えで最後の課題まで敬体を通したのが一人いたが自分らしい表現で主張したいというのであれば、それでよい、自分が表現しやすい文体で書いても構わないことを本人に説いた。

ところがそれとは別に、学生の意識の中には文章表現する上で、尊敬する人物や目上の人に対しての表現になると「です・ます」の敬体表現を取るような傾向が見うけられた。

それは相手に対して尊敬の念をもって表現しようという表れであり、同様な用例が四年生の卒業論文にも見受けられた。

前期の作文指導の段階から後期、二月中半の小論文指導へという移行の段階にかけても少々ではあるが混用例は出てきた。

この文体の統一は日本社会でも文書作成上の注意事項として指導されている。

例えば大学を卒業して社会人となる。そこで企業によっては社内・外向けの文書を発送する。その際の文書作成上の常識として文体についてはかなりの時間をかけて新入社員教育や研修を行っている。

四年生の卒業論文に向けて事前指導として論文の文体様式は主として常体であること

を念頭に置き、自論が展開できるように毎回の指導で喚起してきた。

そこで常体「である」で文末を結ぶようにと説明してきた。多くは体言（名詞）について→吾輩は猫である、彼は学生である。

活用語の連体形に、又は助詞「の」をつけて→夏目漱石が言うのである。彼は書くのだ。山は静かである。彼は立派だ（である）、花は美しいのである（美しいのだ）。食堂は人が多いのだ。と結ぶ。

ところが文末は「である」で結ぶという説明に対して形容詞の場合は終止形（辞書形・言い切りの形）で結ぶ。花は美しい、人が多い、日本語はやさしいなど…。

又は助詞「の」をつけて「である」で結ぶ場合は花は美しいのである、人が多いのである、日本語はやさしいのであると結ぶのが普通である。

しかしこの形容詞に直接に「である」をつけて終止の形を取った用例が多かった。

多いである。辛いである。高いである。低いである。心配ないである。少なくないである。珍しくないであるなど…。

これらの用法は全くないとはいえないがやはり終止の形（辞書形）で結ぶのが望ましい。

多い、辛い、高い、低い、心配ない、少なくない、珍しくない…と。

それとも助詞「の」をつけて前述のように結ぶのが一般的な用法である。

4. 中国語の使用

作文中には使用している語彙（言葉）が日本語として通用するであろうと推測しての表現か、それとも無意識に表現した言葉なのか、文章そのものに違和感を抱かせる表現がある。「明らかに日本語にはない表現、又は日本語と同じ単語でも意味が微妙に違うもの、更に同じ意味合いで使用できる単語で漢字の順序が違うものなどがある」。

中国語は奈良時代に遣隋・遣唐使等によって外来語として多く導入され、宮廷官人達の使用によって日本語として定着したのは多い。

しかし、1200 年以上も経過した現在、同一視はできない。本書の後半部に学生等の作文にも散見するように同じ漢字圏という親しさから日本語を学習するのは安易であろうという論述があった。

使用する文字は同じでも意味や内容を検討（辞典を引くこと）しなければならない。

それに気づけば学習の効果も相当あがるものだ。辞書を引く、なるべくは書物になった辞典がよい。言葉を唱えながら辞典を1ページ1ページめくる。その動作によって頭の中に残っていく。しかも同音異義などの多くの言葉も同時に見ることができるから是非とも辞典を引く習慣を身につけて欲しいものだ。

まず作文中の表現に中国語特有な言葉が使用された例として「提高・邀请・绑架」などがあった。日本語にはない表現で一般の日本人にはどういう意味の言葉なのか検討がつかない。そのような言葉を使用する前に自分が考えている意味合いでも日本語にあるか調べてみる必要がある。辞典を引く労苦は惜しまずにやることである。

次に中国語にも日本語にもあって意味が微妙に違うか、全く別の意味で使用されている場合がある。学生の作文には一度もなかったが「手紙」「新聞」という言葉は中国語と日本語とは全く違う語であるのは周知の通りだ。

ところが「矛盾」は微妙に違う用法である。「矛盾」は中国の故事から発生したものである。韓非子の中の故事の元来の意味で 사용되는のが一般的だ。つまり「前に言った言葉と後で言った言葉が一致しない、事の前後が整わない意味で使われているのだ。

そこで学生等の「矛盾」の使用例を見ると「イスラエルとパレスチナ間には根源的民族矛盾」や「宗教とかいろいろな矛盾」「アメリカと朝鮮の矛盾」のように表現されているがそのような表現は日本語ではしない。それ等は日本語では対立、衝突、又は紛争で表現されている。「イスラエルとパレスチナ間には根源的な民族対立」とし、「アメリカと朝鮮の対立（又は衝突）」に書き換えた。「矛盾」という表現はしっかり吟味して使用すべきである。

次に「全球」という用語にもいささか戸惑う。「全球化・全球中・全球一体化・全球国際化」などがある。語感から推測すれば「全地球」となり、全世界を意味するものだと判断する。全球は全世界、全球化は国際化、全球的は全世界的に、全球一体化を全世界の一体化に書き換える。全球国際化については外来語ではあるが広く使用されている「グローバル化」に換える。学生等が表現しているこの「全球」は新聞やテレビの字幕、又は公共的な催し物や見出しにはよく使用されている用語である。従って彼らにはごく普通に、目にし、口にする用語であって自然にこの用語の表現となったのであろう。

又、中国語と日本語の熟語における語順が逆になっているのがある。その例は枚挙に^{いとま}足りないくらいだ。作文中にも紹介・和平・熱情・命運・因素などがあり、これらは語の順序の上下を換えれば日本語として使用されている。同様な例として明証、制限、载体、質素などがあつた。

しかし「質素」という表現では修正するのに少々ためらった。使用した学生は質素（＝生まれつき持っている性質や能力・将来発展するもととなる性質）の意味で表現しているが質素もよく使用される独立した単語であってその意味は「飾らない、おごらず、つつましい」である。この質素の使用文は「世界の各国の留学生の質素も注目すると言われている」である。この文章の前後関係から推察すると先述の素質の意味に相当するのは明白である。

又、次にあげる用例は語順は逆でも明らかに誤例であり、はじめに指摘したものとは意味合いが違う。社会と表現すべきものを会社、役割を割役、田舎を舎田とあつた。

5. 「的」の用法

形容動詞（ナ形容詞）は物の性質や状態を表す語である。和語的なものとしては「静かだ」「穏やかだ」「安らかだ」などがあり、漢語的な物には「堂々だ」「泰然だ」「立派だ」などである。

ところが中国語の『的』（の）を名詞につけてそのものの性質や状態を表し、形容動詞としての機能を果たす役割を持っている。例えば、作文中で指摘した「国際範囲」を「国際的な規模」に、「根源的民族矛盾」を「根源的な民族対立」に、「情勢が激動だ」を「情勢は激動的だ」に、「廟宇は霊です」を「廟宇は霊的な所です」と書き換えることができる。この「的」を使用した語はかなりあり、作家や評論家などは独自に創造する言葉、いわゆる造語として多用している人もいる。

後期における作文でもこの「的」をつけることによってものの性質や状態を表わすため、効果的な用法となって表現上生きてくる。

「積極に外国交流する」を「積極的に外国と交流する」、「封建な意識」は「封建的な意識」に、「先進な国家」は「先進的な国家」に、「徹底な改革」は「徹底的な改革」、「盲目に多のお金かけて」は「盲目的に多額のお金をかけて」に書き換えていくとそのものの状態が鮮明になり、また、より「日本語的」になっていく。

しかし注意すべき点もある。元来、形容動詞であるものに「的」をつけると変なものになる。これは一例しか見当たらなかったが考慮すべき件かと思う。使用例文は「不思議的に似ている」という表現であったがこの「不思議的」の「的」は不要である。「不思議にもよく似ている」でよい。

「私は伝統的女性である」とあったがそれは「伝統的」にもできるが意味あい上「保守」にして「私は保守的な女性である」に書き換えれば表現上よくなる。

6. 意志を表わす「～う・～よう」の誤例

話し手や書き手の意志を表わす助動詞「～う・～よう」がある。「見よう・しよう・あげよう」など。

その「～よう」の用法を「～ろう」と記述した人が数名いた。その使用例をあげて見ると「かたろう・見ろう・好きにしろ・放棄しろ」といった類の表現である。文章の続き具合・構成、前後関係から察して修正を施した。「団結をかたろう」は「団結を固めよう」に、「外国文化の差別を見ろう」を「外国文化との差異を見よう」に訂正した。「日本語で困る時、放棄しろと思う」は「日本語の文法で悩んだ時は放棄しようと思った」に正した。

「私の答えは好きにしろ」という文章でこれは文の前後関係を考えなければならない文章である。作文中では「一体どちらの方がいいか言われると私の答えは好きにしろ」であるがこれは「一体何がいいのかと問われたら自分が好きなようにしなさい」とか「自分が気が向くように好き勝手にしなさいと答える」といった表現を例示した。

四例ではあるが「～ろう」の表現も注意すべき点であろう。

7. その他の表現

「～をあげた」は話し言葉ではよく使用される。「彼に本をあげた」で物品などを「やる・与える」意味である。本来相手を敬って丁寧な表現である。作文中の使用例を見てみよう。「中国は世界文化に影響をあげた」「西洋まで影響をあげた」の例である。影響という抽象的な表現の場合と、具体的な物品名を出してそれを「差し上げる・進呈する」という用法とは違う。この用例から判断すると「影響」を「与えた」「及ぼした」がふさわしい。もう一つの例に「琉球料理はちゃんと中国の影響をあげている」という文の表現は「琉球料理は確かに中国の影響を受けている」と書き直せば文章として解りやすい。

この「あげた→あげる」の用法は多岐にわたり、種々の用例がある。日本語の学習をより一層深めるために『広辞苑』の「あげる」の項目を是非目を通して欲しい。なるべく電子辞典ではなく『広辞苑』原書を薦めたい。

「珍しい」について

これは前期のまとめでも記述したが作文指導をしてその「珍しい」の用法に奇異に感じたので再度記述することにした。

「珍しい」は一般に使用される場合の意味合いは「めったにない、見るのが稀である、久しぶりである、風変わりである、珍奇である」などである。前期提出の作文例で検討してみよう。まず意味上の用語では通用するかも知れないが文章の表現上ではあまりふさわしくない。

『三年になって余暇は私にとって珍しいものになった』とあるがその「珍しい」は「めったにない」ということから派生して「なかなか得がたい・入手することができない」ということから余暇・時間というのは自分が自由に行動できる時間はなかなかない。大切な、貴重な時間となる。従って『余暇という時間は私にとって貴重な物になった』と書き換えるようにした。同様な表現で別の学生も『時間は僕にとって一番珍しいものである』も『時間は僕にとって一番大切な(貴重な)ものである』と書き換えれば表現上ふさわしくなる。

「神舟5号成功に思う」で「楊利偉は珍しい機会をもらった」の文章に対して「楊利偉は得がたい機会を手にした」の表現に換え、その意味を汲めば、「素晴らしい機会」とか、「有り難い機会」としてもよい。課題「国慶節に思う」という文中に「鮮やかに国旗が掛けられ珍しい光景である」も「鮮やかに国旗がひるがえって素晴らしい光景を目にした」とした。又『子供の頃の春節は記憶は珍しい』この文章での「珍しい」は子供の頃楽しかった春節を思い出して『子供の頃の春節が懐かしい』と懐古の意味で「懐かしい」に直した。次の用例も変わった例文である。「イラク人民は命が珍しい」とあり、この場合は「惜しい、惜しがる」(＝かけがえのないものとして愛着を感じているさま、失いたくない)に換え、「イラク人民は当然命が惜しいのだ」と。

だが後期にはこの「珍しい」の用法は適正に使用され、修正したのは二点のみ。一つは国際ボランティアの課題作文で「技術型の人材も珍しい財産である」は「技術者養成の援助もすぐれた財産となる(～も貴重な貢献となる)」に修正した。他の一つは「自然資料が珍しい」は「自然の資源は大切(貴重)である」。

以上「珍しい」の使用例から表現上、その文章に適切であるかどうか考えねばならない。適切な表現としては「パンダのような珍しい動物」「華南人には珍しい雪」「広州には珍しい食材がある」などである。

8. 表現した文章の推敲と添削

今まで記述した各項目は特殊の用例と見てよい。「文字について」「文体について」は別として、文章の表現上、日本語にはない表現、例えば中国語をそのまま記述した文章などは作文としては不適切である。

意志的表現で「～よう・～う」が文中に「ろう」として使っている。それは自明の理として誰でも気づく誤記である。

しかし、表現した文章で読んでいて何かひっかかりがあり、首をかしげる文章などがある。そのような文章こそ「推敲」が必要なのだ。一通り書き上げた文(作文や小論文など)を読み直してみる。言おうとすることは十分に言い尽くされているか、文の呼応関係はどうか、その文章にふさわしい表現は何か、言葉づかいは適切であるかなど、文章をよく

くするために、よい表現にするために考えに考え尽くして、文章を練りに練り上げることが大切である。書いた本人がやるこの作業が『推敲』である。

唐代の詩人・賈島の故事のように書き上げた詩文を何度も読み返し、そしてそこにふさわしい言葉で表現していくことが最も大切である。その作業には多くの時間をかける必要がある。

次は提出された作文に更に補助する立場で上述のような作業を再び行うのが添削である。

提出された文を熟読し、不適切な表現を指摘して適当な表現は何か、言い換えるのにふさわしい言葉はないか、などを考慮しながら作業をすすめる。その作業の過程で「適切

な、ふさわしい」言葉があれば書き添えていくことを「添」、不適切な表現や誤った表記などを削り除くことを「削」という。つまり修辞である。『広辞苑』によくと修辞とは「①ことばを有効適切に用い、もしくは修飾的な語句を巧みに用いて、表現すること。また、その技術。②ことばを飾り立てること。また、その技術。」

その修辞（添削）の作業を通してよりよい文章になるように朱字で訂正をしていく。

さて、その朱字で指摘され、訂正された文を再度検討してみよう。自分の文章内に取り入れ、吸収するためによく咀嚼（文章などの意味をよく考えて味わうこと）することが大切である。

添削する立場でいうとやはり何度も読み、前後関係は呼応しているか、内容的に矛盾はないか配慮しながら、つけ加え「添」、文を取り除く「削」をしていくのである。

従って細心の気配りや多くの時間を費やして行っている。その修正文を「他山の石」として自分を向上させるために参考にすることを切望する。修正文の一、二を例にしてこの項を閉じよう。

課題「性差について」の作文に「(女性が) 子供の生産後」という表現が二例あった。「生産」という語は意味上では確かに「生む・産む」にちがいないがこの「生産」は物品を作り出すに用いて人間の場合はあまり使わない。

赤ちゃんの場合は一般ではお産とか出産という言葉を使う。そこで添削作業では「生産」を削り、「出産(又はお産)」を付け加えた。もう一例は「国際ボランティア」の課題『どうして肌の顔で国の名前で別れているのか』という文に対し、この文での指摘箇所は「顔」と「別れている」である。作文の筆者が意図するのは人種差別に対する問題である。

「肌の色」を「顔」と表現したのは中国語の「顔色」からの表現であり、又、国の名前は国名に直す。指摘した「別れている」は「差別している」に訂正する。その文を『どうして肌の色や国名だけで差別するのか』に修正すると文の前後関係もよく、言おうとするところも表現されていよう。

終わりに日本語による文章表現は一朝一夕で上達するものではない。

今まで学習したものを繰り返し学習する、すなわち反復学習をしながら日本語に対する知識を蓄積していく。しかしながら知識はあってもそれを応用し、使用できなければ無意味である。文章でもそうであるが一番肝心なのは言葉(会話)にして使用することである。

「書き言葉」と「話し言葉」は連動していかなければならない。言葉・言語は人と人との伝達手段である。書き言葉で伝達しようとすれば手紙・作文・論文。話し言葉で伝達使用とすれば会話やスピーチ、講演である。

そこで日本語の学習として心がけて欲しいのは、書いている言葉を話し言葉に、話している言葉を書き言葉にそれぞれ相互にやってみることである。日本語を習熟するための訓練である。つまり一つの学習である。自分に言い聞かせるには日本語日記を、遠く離れている人には手紙で、又、自分の考えや意見を自由に書き綴っていく。いわゆる論文や随筆など書いていく習慣をつければ上達も早い。

そして友人と先生と日本人と多くの人々と日本語で会話を交わす機会を多く作っていけば一段と磨きもかかり、自分の宝石の輝きも増してくるにちがいない。

1 自己紹介（推薦文）

- ◆ 専攻として日本語を勉強しました。——日本語を専攻して勉強してきました。
- ◆ 先生方のお陰さまで日本語は次第に上達するようになりました。
——先生方のお蔭で日本語は次第に上達するようになりました。
- ◆ これがちょうど私が勤めたいところなのです。——貴社は私が勤めたい理想的な会社です。
- ◆ 仮に私が貴社に入ると、利益を大事にします。——幸にして貴社に入社できましたら、会社の利益を優先にして勤めます。
- ◆ 貴社に入るのが私がずっとのめざしです。——貴社に勤めることが私の長年の夢（目標）でした。
- ◆ 貴社が採用する人材にあたりなんです。——貴社の採用条件の人材に該当します。
- ◆ 大学四年間、この分野にいろいろな研究し、いい成績を取ったんです。——大学四年間、貴社の要求している条件の分野をいろいろ研究し、即戦力になれるように努めてきました。
- ◆ だから私はこの仕事に努められると思います。——ですから、この仕事にすぐ対応できる自信があります。
- ◆ 人と付き合って、いい仲間になるのは私が得意です。——対人関係はよく、誰とでも仲良くなれるのが私の取得（長所）です。
- ◆ 貴社の返事をお待ちします。——貴社からの吉報をお待ちしております。

- ◆ 自己紹介します。特別は山に登ることなんです。——自己紹介いたします、趣味は山登り（登山）です。
- ◆ 私の専門は日本語だからこの言語を把握したいです。——専攻は日本語ですから、早く習得したいです。
- ◆ 使用した卓球の中に貴社の産品が一番いい。——（私が）今まで使用してきた球の中で貴社の製品が一番（最も）優れた球です。
- ◆ （日本語を専攻したのは）一番直接の原因はあたりまえ漫画です。——日本語を学ぼうという直接的な動機（理由）は漫画やアニメからです。
- ◆ 以前ほんやくをめちゃめちゃした漫画を読むことあるので——以前に翻訳がでたらめ（いい加減な）漫画を読んだことがあったので
- ◆ そのあと 写作に一生懸命にした。——それ以来作文に関しては真剣に（一生懸命に）とりくむようにした。
- ◆ 名前について紹介すると多分父は私がきれいになれることがほしいだから「珊」採用した。——名前のいわれを説明（紹介）しますと、おそらく父親は娘がきれいになってほしいという思いがあって「珊」を名づけたと思います。
- ◆ オリンピックが行いましたから、その中で一番激動したのはハードルです。——オリンピックが開催された中で一番感動したのは男子110メートルバードル競争です。

- ◆ 優れた先生から知識とか精神とかもらっていただきました。——本校の優秀な先生方から多くの知識や精神を教えていただきました。
- ◆ 会社の皆様、私をとっていただけませんか。——新入社員選考委員の皆様、私を採用していただけるよう切望します。
- ◆ 面接官たちが私のことを考えて採用してもらいたいです。——面接をなされた方々が私という人物（人となり）を見ていただいて採用してもらいたいものです。
- ◆ 私は性格が明るいで これからの間 いろいろお願いします。——私の性格は明朗で活発です。今後よろしくお願いします。
- ◆ 学校に推薦してこの大学に入学させました——高校の推薦で本校に入学させてもらいました。
- ◆ 直接大学二年に入りました。——飛び級生として二年生扱いになりました。
- ◆ 日本の歴史や文化も少しずつ了解してきました——日本の歴史や文化も少しずつ理解できるようになりました。
- ◆ 会議を主持した経験はあるし——会議の司会（進行係）をした経験もあります。
- ◆ 私は本当に皆さんと一緒にこの会社にあることが努力したいです——私は社員の皆様と共に貴社のために誠心誠意努力するつもりです（します）。
- ◆ 私は強い言語力と領導力を持っています——私は高い日本語能

力と指導性があります。

- ◆ 私の知識と知恵で貴社のために働いていただきましょう——私が持っている知識や能力でもって貴社のために一生懸命働きます。
- ◆ これから頑張りますようにと思いながら——今後も頑張りたいと思います。
- ◆ 別々な知識で中日の橋になりたいです。——色々な（多くの）知識を得て中日間の掛け橋になりたいと思っています（考えています）。
- ◆ 将来は訳に関係のある仕事をしたいのです。—— 将来（日本語の能力を生かして）翻訳か通訳の仕事をしたいです（～と考えています、～と思っています）。
- ◆ 立派な通訳になる夢も叶えます——立派な通訳になる夢を持っています。
- ◆ 専門の訓練をとりました——翻訳（通訳）の専門科目も取得しました。
- ◆ 私はコーヒーを大好きで卒業したと思うとすぐ自らの喫茶店を経営しよう——私はコーヒーが大好きなので、卒業したらすぐ自分の喫茶店を経営しようと企画（計画）しています。
- ◆ 私は自分の産業を建てる——私は自分の会社（企業）を設立したい（建設したい）。
- ◆ 私の性格は明るい、熱情です——私の性格は明るく、熱心（真

面目) です。



専門—専門

ご会社、お会社—貴社

複雑—複雑

指導—指導

一等奖—一位 (一等賞)

困难—困難

厳しく—厳しく

人類—人類

过程—過程

大沢な人生—多くの人生

何故からという—何故なら

スフィーツ、スポーツ—スポーツ

ソフトフェ—ソフトウェア

フレート—フルート

バスケットボール—バスケットボール

コンピンタ、コンフェーター—コンピュータ

ユーモ—ユーモア

ホームシク—ホームシック

出掛けの前—出掛ける前 張頑っていきます—頑張っています

頑強し始めて—勉強し始めて

外形のきれより—外形の美しさ (奇麗さ) より

中学を出身しました—中学を卒業しました

2 故郷を語る

- ◆ 故郷の山は兎とかがないだから—故郷の山は兎はいないから
(いませんから)
- ◆ その時のことは懐かしいですね—子供の頃が懐かしく思い出されますね。
- ◆ 心の中で保存します—心の中に大切にしまっています
- ◆ 故郷は多勢の人にいらせています——故郷は多勢の（多くの）
人々にいられています
- ◆ 気候のおかげに果物が豊富に産生します——（温暖な）気候の
おかげで果物が豊富に生産されます（生産しています）
- ◆ ほかの有名のは湛江の海鮮に当たります——他に名産といえは
湛江で漁れる鮮魚です。
- ◆ 營養価値の海鮮が食べられる——栄養豊富な海鮮料理が食べら
れる。
- ◆ 是非湛江に來ますよ——必ず（是非とも）湛江に（へ）遊びに
來てください。
- ◆ 暇があれば是非見っていきますよ——暇があれば是非おいでく
ださい。
- ◆ 私は故郷を離れますけど故郷思念する——私は現在（今）故郷
を離れていますが、時々思い出しています。
- ◆ 故郷の小屋にもどかえります——（夢の中で）故郷の懐かしい
我が家に戻ります。